

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 88 号

2022 年 3 月

日本薬史学会 2022 年度の主要行事のご案内

編集委員長 齋藤充生

2020年2月のダイヤモンド・プリンセス号での集団発生を日本のコロナ禍の始まりとすると、早くも丸2年以上が経過しました。ワクチン・治療薬の開発は通常の医薬品開発を考えれば驚異的なスピードで進み、日本国内での当初承認の2回のワクチン接種も東京オリンピック前後までに行き渡り、昨年の秋冬には緊急事態宣言も解除され小康状態となりました。しかしながら新型コロナ側も手ごわく、変異を続け、オミクロン株による第6波で3回目のワクチン接種を余儀なくされる状況となりました。

コロナの状況を見ながらとなりますが、今年は4月予定の総会・総会講演はオンライン開催の見込みながら、年会は対面開催を視野に入れている状況です。各行事に多数の会員のご参加をお待ちしています。

昨年末の会員名簿の発行に引き続き、2022年度

前半には学会 HP のリニューアル、薬史学教科書の刊行、日本薬学会から受託した「ファルマシア」への「日本薬学会史年表」の掲載なども行われる予定です。また、70周年記念行事の準備も進んでおります。会員の皆様におかれましても、学会の活性化にご協力をお願いいたします。

なお、コロナの状況によっては、行事の実施方法等に変更が生じる可能性がありますので、最新の情報は学会 HP よりご確認をお願いいたします。

1. 日本薬史学会 2022 年会の開催について

日 時：2022 年 11 月 5 日 (土)

年会長：江戸 清人

(エコー電力ビル薬局顧問)

会 場：東北大学薬学研究科・薬学部棟

(懇親会および翌日の薬史ツアーを予定)

日本薬史学会 2021 年会 (千葉) の報告

年会長：松崎 桂一 (日本大学薬学部教授)

COVID-19の影響で2020年の年会を中止したが、2年連続中止するわけにはいかないと考え、2021年は令和3年10月23日(土)にZOOMによるオンラインで開催した。

本年会は参加登録者60名(会員52名、非会員4名、学生4名)で、森本会長の基調講演で始まり、一般講演10演題で実施した。昼休みにはオンラインで理事・評議員会を開催した。

森本会長の基調講演は「COVID-19が、日本薬史学会に教えてくれていること」の題目で、コロナ禍での本学会の歩んだ道と疫病に関する歴史を踏まえて、アフターコロナの私たちの進むべき道を示してくださいました。

一般講演では、桐原正之先生によりフッ素化医薬品が合成でのみ得られるものであり、フッ素化試薬の基礎からフッ素化医薬品合成法の歴史を紹介して

いただいた。齋藤充生先生は、ディオバン事件を背景に戦後薬事法における広告規制について講演された。但野恭一先生には、第十八改正日本薬局方の改正方針と今後の日本薬局方の歩む道として国内外で広く使用されるように改正・発展する重要性を説かれた。西谷篤彦先生には、Dr. Joseph A. Oddisが米国薬剤師会での活動とそれらが日本の薬剤師の業務にいかに関与を与え、薬剤師が医療人としてどの様に変貌していった過程をご講演いただいた。

後半では、森本和滋先生がバイオシミラー（後続品）の品質評価技術の進歩と国内外における規制動向についてご講演された。続いて宮崎生子先生には、バイオ医薬品である抗体医薬品による我が国における副作用被害事例を交えながら副作用救済制度の必要性を話された。五位野政彦先生は、明治40年山梨県で起こった大水害で薬剤師・志村権左衛門による災害医療支援が実施された事例を現在の災害支援に照らし合わせて、当時から薬剤師が災害医療に深く関わってきたことをご講演された。

西原正和先生は、佐渡におけるホソバオケラの歴史的背景を文献と聞き取り調査を通じて現況を講演いただいた。石毛久美子先生のご発表では江戸時代から続く佐原小川薬局の自家製剤「小川胃病丸」の全国展開の様子を鉄道網の発達と関連づけたご講演であった。最後に松崎が日本大学薬学部薬用植物園の成り立ちを木村雄四郎先生の足跡と共に考察した内容でお聞きいただいた。

コロナ禍にもかかわらず、またオンラインでありながらも貴重な研究発表をしていただきました諸先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。また、活発なご討論を通じて会を盛り上げてくださいましたご参加の皆様は厚く御礼申し上げます。オンライン開催のため、一部の参加者には接続にご苦勞をおかけしました。大変申し訳ありません。懇親会、薬史ツアーにて皆さまの元気なお姿を拝見することができなかったのが大変残念ですが、次回仙台にて一堂に会して年會が盛會になることを祈っています。

日本薬史学会2022年會（宮城）のご案内（その1）

日本薬史学会2022年會（宮城）

年會長 江戸清人

本年11月5日（土）に東北大学青葉山キャンパスの東北大学大学院薬学研究科・薬学部棟を会場として日本薬史学会2022年會（宮城）を開催いたします。この仙台で日本薬史学会を開催できること仙台の関係者一同、望外の喜びで、大変光栄なことと思っております。

学会の内容は、『みちのくで、薬学の歴史、薬史を語ろう！議論しよう！』をスローガンに、午前に特別講演Ⅰをアンジェス株式会社の代表取締役社長山田 英氏による、『我が国のベンチャービジネス、医薬品を例に、現在と将来』と題し、さらに、午後に特別講演Ⅱ・市民公開講座として、日本国史学会理事長・東北大学名誉教授（文学部）田中英道氏による『日本史が変わってきている—古代史のエビデンスが蓄積』をお願いしております。さらに一般講演として、口頭発表およびポスター発表を行います。学会終了後、ささやかですが懇親會も予定していま

す。

次の日11月6日（日）には終日で『薬史ツアー』を計画しております。まだ変更の余地はありますが、仙台から程近い、多賀城市にある、多賀城の史蹟の見学および『東北歴史博物館』の観覧を計画しています。

なお、薬剤師生涯研修制度のシール（3単位）の申請は予定しています。

懇親會も予定しておりますが、前日あるいは当日学会終了後、仙台の繁華街『国分町』他に是非お立ち寄り、コロナで弱っている仙台繁華街にも元氣を与えていただければ幸いです。なお、コロナ禍等が収束しない場合対面開催からオンライン開催への変更も視野に入れての準備を考えています。

日本薬史学会2022年會（宮城）の準備状況は、日本薬史学会のホームページを介して随時、お伝えいたします。

仙台の秋は魚介類が特に美味しい季節です。

何故仙台の魚介類が美味しいのか、その答えは“宮城県には特定第3種漁港が3港ある”ことです。特定第3種漁港とは、利用範囲が全国的な漁港のうち、水産業の振興のためには特に重要であるとして漁港漁場整備法の政令で定められた漁港です。略称は「特三」。本州と九州にのみ分布し、全国に13港あります。宮城県は北から『気仙沼港』、『石巻港』、『塩竈港』と13港のうち宮城県には3魚港を占めています [以上、Wikipedia]。生きのいい魚が東京築地

にも運ばれるのは、もちろんですが、仙台の地元市場に卸されます。

11月初めに多くの方に対面でお会いできることを熱望します。宮城の大変美味しい、秋刀魚、カキ、ホタテ等を堪能していただきたいと思います。また、宮城には、秋保(あきゅう)、鳴子温泉、作並温泉など沢山の温泉も湧いております。この機会に紅葉の季節、宮城県内の温泉への宿泊もお勧めです。

令和4年1月29日(土)現在

日本薬史学会主催／

東北大学薬学研究科・薬学部共催

日本薬史学会2022年会(宮城)



◇学会 開催年月日 令和4年11月5日(土)

会場：東北大学薬学研究科・薬学部棟／

アクセス：JR仙台駅西口、地下鉄東西線「八木山動物公園行き」にて9分、「青葉山駅」下車、徒歩5分。片道250円。タクシー仙台駅から約15分、約2,000円

予定：特別講演Ⅰ、特別講演Ⅱ・市民公開講座、一般口頭およびポスター発表

◇薬史ツアー 開催年月日 令和4年11月6日(日)

東日本大震災遺構(仙台市荒浜小学校)／多賀城遺跡・東北歴史博物館見学／日本三景松島瑞巖寺観光を予定(現時点では内容変更の可能性もあり。)

日本薬史学会2022年会(宮城)

実行委員会メンバー及び事務局

・年会長

江戸清人(エコー電力ビル薬局顧問)

e-mail: k_seikichi_edo@yahoo.co.jp

・実行委員長

富岡佳久(東北大学大学院薬学研究科教授)

e-mail: yoshihisa.tomioka.a6@tohoku.ac.jp

・実行副委員長

村井ユリ子(東北医科薬科大学薬学部教授)

e-mail: y-murai@tohoku-mpu.ac.jp

・大会事務局

東北大学大学院薬学研究科

がん化学療法薬学分野内

「日本薬史学会2022年会(宮城)」事務局

〒980-8578

宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3

TEL 022-795-6851 FAX 022-795-6851

e-mail: ytomioka@tohoku.ac.jp

「名古屋城からはじまる植物物語」の紹介と報告

常任理事・中部支部長 河村典久

コロナ禍のため、中部支部会としての活動は行うことができなかったが、名古屋地区での薬史学関連事項について紹介したい。

表題の企画展が名古屋新栄のヤマザキマザック美術館において令和3年(2021)4月24日から8月29

日まで開かれた。坂上しのぶ学芸員の企画による伊藤藤圭介を中心にした尾張本草学の業績から、関連する数百点の資料を一堂に会しての展示は、これまではかつてなかったもので、中でも名古屋城本丸御殿天井板絵「藤花図」(寛永11年(1634)狩野探幽

を中心に狩野派の絵師が制作)は重要文化財で、令和元年(2019)名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作共同体(愛知県立芸術大学日本画保存模写研究会および加藤純子氏ら)により名古屋城本丸御殿が建てられた時に描かれた当時の色合いの復元がなされた。金箔に水墨や岩絵の具で描かれた、きらびやかな当時の美を目にすることができるものでした。江戸初期の絵画様式や色彩感覚そのものを見られるもので、400年前の絵師たちの美意識を今に伝えるものでもあった。

展示品では、東山動植物園(名古屋市指定有形文化財)の『ターヘル・アナトミア1734年』、エーザイクすり博物館の『シーボルトの薬箱』、そして名古屋園芸・雑花園文庫からは多数の絵図・古文書や『姉羽鶴画賛』軸装など、今回初公開の貴重な資料も展示された。館の1階には名古屋城の金のシャチホコの等身大レプリカが展示され、中でも当美術館所蔵のエミール・ガレの作品とのコラボは、企画した坂上しのぶ学芸員のきめの細やかさを感じさせるものであった。また、随所に山田栄梨子・ボタニカルアーティストによる植物画も展示され、これらの企画展出品作品185点のうち、138点を掲載、A5判(210

×147mm)・全148頁(表紙等含む)に及ぶ詳細な図録も会場で販売されていた。

期間中、伊藤圭介の関連講演会が近隣の会場で開催された。「プラントハンター物語」(西田佐知子)、「尾張藩の『御深井御薬園』」(河村典久)、「圭介先生の書画 コレクターが見た文人伊藤圭介」(小笠原左衛門尉亮軒・雑花園文庫庫主)、「シーボルトと伊藤圭介」(松田清)をはじめ7題の講演会が行われたが、コロナ禍の影響で、参加者を30名に限定しての開催で、聴講申込み初日に10分で満席となる盛況であった。



「海外の薬史学会の今(8)イタリア」

国際委員会 但野恭一

国際薬史学会(ISHP)には現在26か国の29組織が加盟しており、2022年9月には1年延期となった第45回 ISHP Congressがイタリアのミラノで開催予定であることから、イタリア薬史学会(ACCADEMIA ITALIANA DI STORIA DELLA FARMACIA: AISF)の活動内容を紹介する。

2020年11月28～29日にCovid-19のパンデミックのため、AISFの第70回全国大会はフェラーラ大学の支援を受けてオンラインで開催された。最近の歴史のおよび製薬的研究に関する多くの演題が発表され、学会の電子ジャーナル「Atti eMemorie (1984年から4か月ごとに発行)」で公開される。幸いこれまでCovid-19で亡くなった同僚はおらず、2021年夏には第71回全国大会を開催(Covid-19のパンデミック制限の場合はオンライン)する予定。2021年に

は、AISFの新評議会の選挙が行われる。AISFは、第45回 ISHP Congressを2022年9月7～10日にミラノの歴史ある名門の病院Ca' Granda(現ミラノ大学)で開催する準備に取り組んでいる。国際会議のメインテーマは「健康と幸福(Well-being)」となる予定である。WHOの最も重要な目標は、「最高レベルの健康の達成」、即ち、単に病気や虚弱ではないというだけでなく、肉体的、精神的、社会的幸福のトータルでの健康」として定義される。このため、会議のトピックは、1668年に作成された世界で最初の公定薬局方「Prospectus Pharmaceuticus sub quo Antidotarium Mediolanense」が起点になり、AISFは今後、会長を通じて国際会議の最終タイトルを伝える予定である。

この1年を振り返って

学会誌刊行センター 館内 航

会員の皆様、はじめまして。昨年より新しく薬史学雑誌の編集を担当しております、館内^{たてうち}航^{わたる}と申します。前任の大角は本学会の編集を20年務めていたということで、それを継ぐことの重責を感じております。

この一年は初めての編集、初めての薬学との関わり、と慣れない業務をこなすので精一杯で、時が流れるのがあっという間でした。大学での専攻は18世紀イギリス文学という薬学とはかけ離れた分野で、理系に関して学んだことといえばせいぜいその時代の科学史や医学史をほんの少し扱った程度です。なので、実のところ薬学や薬史学については浅学非才の身であり、ご投稿いただいた原稿を読みつつ私も勉強している最中です。

いくつかの学会誌を担当しておりますが、薬史学会はその中でも業務の種類が最も多種多様です。薬史学雑誌の編集だけではなく、外部からの論文転載許諾のお願いや学会へのアンケート、時には海外か

ら薬史学に関する情報を教えてほしいと英語でメールが来ることもあります(スパムメールと見分けなければなりません)。そのため学会に参加する比重も他の学会よりも高く、いわば学会の窓口として対応する必要があるのが大変なところ です。

齋藤編集委員長をはじめ、森本会長、小清水総務委員長、横山財務・会員管理委員長には、外部から学会へのお問い合わせが来るとご相談を幾度もいたしましたして、お忙しいにもかかわらずその度に迅速かつ適切なアドバイスをいただいております。また、学会誌刊行センターの上司^{むろ}の室には、編集の基礎から化学用語の表記法まで手取り足取りご教授いただき大変お世話になっております。私を支えてくださっている方々に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

未熟な私で至らぬ点も多くございますが、会員の皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

[資料]

J-STAGE へのアクセス状況について

2020年7月より、薬史学雑誌掲載論文のJ-STAGEへの掲載を開始しました。日英に対応し、それぞれのページから論文単位で検索できるなど、使い勝手もよく、また、2021年発刊分からはJ-STAGEデータをもとに、著者抄録(日本語)が医中誌に収録されるようになっていきます。

これまでのJ-STAGEへのアクセス状況を表にまとめました。当初、資料TOPへアクセス数が多いのは、新規収録雑誌としてJ-STAGEで紹介されていたためと思われます。その後、TOPへのアクセス数は落ち着いていますが、書誌事項や全文PDFはかなりの水準を保っています。

薬史学雑誌では原則として邦文論文でも英文タイ

トル、英語抄録・英語キーワードを記載しておりますので、英語ページから見ても、概要が分かるようになっています。

また、論文単位で固有識別子(DOI)が付されますので、研究成果の紹介としても役立ちます。

会員の皆様の研究成果発表の場として薬史学雑誌への投稿をお待ちしております。

J-STAGE

日本語 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjhp/-char/ja>

英語 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjhp/-char/en>

資料 J-STAGE へのアクセス状況（括弧内はクローラーを除いた内数）

年 月	資料 TOP			書誌事項			全文 PDF
	英語画面	日本語画面	合 計	英語画面	日本語画面	合 計	
2020年7月	1183 (1170)	2387 (2368)	3570 (3538)	1054 (1032)	2502 (2440)	3556 (3472)	1583 (1511)
8月	738 (734)	3406 (3392)	4144 (4126)	2001 (1973)	4188 (4076)	6189 (6049)	2612 (2550)
9月	221 (221)	347 (303)	568 (524)	497 (494)	1144 (1095)	1641 (1589)	1293 (1261)
10月	156 (156)	305 (292)	461 (448)	490 (489)	786 (731)	1276 (1220)	1751 (1735)
11月	138 (137)	345 (325)	483 (462)	287 (279)	887 (823)	1174 (1102)	1775 (1732)
12月	196 (196)	490 (479)	686 (675)	1591 (1589)	3002 (2949)	4593 (4538)	5392 (5363)
2021年1月	96 (96)	311 (304)	407 (400)	804 (804)	1619 (1559)	2423 (2363)	3179 (3137)
2月	21 (21)	169 (164)	190 (185)	451 (450)	1319 (1265)	1770 (1715)	2448 (2339)
3月	20 (20)	187 (180)	207 (200)	514 (514)	1976 (1917)	2490 (2431)	2954 (2877)
4月	22 (22)	171 (165)	193 (187)	114 (113)	1006 (945)	1120 (1058)	2767 (2742)
5月	42 (42)	211 (206)	253 (248)	144 (143)	1167 (1086)	1311 (1229)	3848 (3803)
6月	37 (37)	176 (172)	213 (209)	368 (367)	1389 (1316)	1757 (1683)	4386 (4354)
7月	124 (124)	259 (246)	383 (370)	664 (662)	1353 (1272)	2017 (1934)	4606 (4551)
8月	65 (65)	261 (255)	326 (320)	419 (413)	1878 (1808)	2297 (2221)	3959 (3895)
9月	38 (38)	186 (165)	224 (203)	254 (252)	1439 (1381)	1693 (1633)	3702 (3601)
10月	23 (23)	235 (193)	258 (216)	347 (343)	1415 (1339)	1762 (1682)	4302 (4132)
11月	18 (18)	195 (166)	213 (184)	742 (730)	1636 (1523)	2378 (2253)	4047 (3900)
12月	25 (24)	204 (164)	229 (188)	292 (287)	1906 (1787)	2198 (2074)	3996 (3784)
2022年1月	24 (24)	187 (162)	211 (186)	420 (415)	1985 (1920)	2405 (2335)	4867 (4657)

コラム

ご存じですか

本学会は学術研究活動、会員構成、機関誌発行等の要件を満たし、日本学術会議協力学術研究団体です。学会名鑑にも登録され、学術活動に関する各種調査に協力しているほか、大学と同等に日本学術振興会への候補者の推薦等も可能な機関とされています。

<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/detail/?id=G01949>

〔Book紹介〕

洋学史学会監修 洋学史研究事典

B5判 516頁 定価：14,300円(税込) 思文閣出版

六史学会の構成団体である洋学史学会より、本学会事務局に「洋学史研究事典」を寄贈いただいた。南蛮・蘭学を中心に、明治初頭までカバーし、教育、医学、動植物学分野など、本学会員の研究の参考にもなる資料と思われるので紹介したい。昭和59年発刊の「洋学史事典」(日蘭学会編)が用語解説と巻末の年表からなるいわゆる辞書形式であったのに対し、本書は研究方法を示した5ページの総論に続き、体系的に各項目を1～2ページでまとめた研究篇、各県の洋学の流れや史料をこれも各項目1～2ページでまとめた地域篇に分かれる特徴的な編纂方式となっている。また、項目ごとに参考文献が挙げられているので、自分の興味ある所から読み進めることができ、大変便利である。医学、薬学以外にも諸書籍の紹介やガラス、陶磁器、染織品、漆器、食材、園芸、地図、航海術、写真などの技術史や展覧会や博物館の成り立ち、世界事情など、時代背景を手軽に知ることができる参考資料として、研究の着想に役立ちそうである。変わったところでは、鼈甲や象牙の細工物、人魚のミイラなども項立てされている。通史的な書物では、上方、江戸、長崎などが中心

となりがちであるが、本書では各地の博物館等で活躍している著者による充実した地域篇があることで、バランスよく地元の歴史に触れることができる。県内の様々なエピソードが集められ、各地域の特色を知る興味深い資料であるばかりでなく、付録として史料所在目録も整備され、これから地域に根差した研究を始める際の拠り所ともなるものである。これが本書の題名を「研究事典」とした所以であろう。

200名を超える著者によるこれだけの執筆内容を、取り回しやすい500ページほどにまとめた編集委員会のご尽力はいかばかりか、驚嘆するばかりである。

地域史研究としての価値も高い「読む事典」として各地の公共図書館などにも配架されることを望みたい。

(齋藤充生)



叙勲のお知らせ

当学会の松本和男名誉会員が、令和3年秋の叙勲で「旭日単光章(中小企業振興功労)」を受章なさいました。

荣誉に輝かれましたことを心よりお慶び申し上げます。

なお、薬史学雑誌56(1)より総説「20世紀末までの医薬・農業に関わる日本の有機化学研究史」の連載が掲載されております。

訃報

本学会名誉会員の山田光男先生が2021年7月24日に逝去されました(享年97歳)。最近では、薬史レター82号から85号まで薬史往来に本学会の後進へのメッセージをご寄稿いただいております。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

研究室に眠っていた資料 ～中国本草書和刻本と明治期教科書写本～

東京大学大学院薬学系研究科 天然物化学教室 志茂 将太郎

東京大学大学院薬学系研究科天然物化学教室は、明治26年に薬学科に設置された生薬学教室に由来する最も長い歴史を持つ研究室の一つである。古い史料についてはその多くが附属図書館や総合研究博物館等適切な機関に移管されたと聞いているが、昨年夏、実験室の片隅の段ボールから50冊に上る資料群が発見された。

この資料群は昭和12年に本草圖書刊行會が刊行した新修本草の復刻印刷に加え、明治期に使用していたと思われる教科書の写本4冊、そして昭和41年に本学薬学部教授であった浮田忠之進先生より寄贈された江戸時代の本草書版本からなっている。

教科書写本は欠落こそあるものの、下山順一郎先生の「生薬学」や大井玄洞先生の「生薬学」といった日本における西洋生薬学黎明期を伝える貴重な写本である。筆者は野崎清三郎なる薬剤師で、国会図書館にある薬局必携諸量一覽(1889)の著者であり、まさに日本薬学黎明期と言える時期の人物である。

資料群の大部分を占める版本は、本草綱目全36冊と黄帝内経全9冊の計45冊となっている。本草綱目の日本語版本については白井、渡邊らの先行研究¹⁾に詳しいが、本資料は題箋に「大字正誤 本草綱目」と記されており、寛永本の系統の版本で印刷された印年未詳本であると思

われる。同一の版本は植物図鑑で知られる牧野博士が報告²⁾した2揃(高知県立牧野植物園牧野文庫所蔵、うち1揃は欠本あり)に加えて額田記念東邦大学資料室が所蔵している1揃の計3揃が確認できる。この版は四周双線であった承應二年京都野田彌次右衛門重訂補刊本の版本を一部校正し、子持線を削去して四周単線にしたもの^{1a, 2)}らしいのだが、額田記念文庫本と本資料は共に四周双線のままとなっている点が興味深い。黄帝内経については先行研究に乏しく詳しいことがなかなかわからないが、本文は内閣文庫本(安政2年刊、請求番号300-0141)に酷似している。

現在薬史学文庫にこのような古典籍はほとんどない。いつ水損や焼損で永久に失われるかわからない資料の保護収集は史学分野における喫緊の課題だろう。なかなか全てをリストアップするのは難しいが、気が向いたときに近くのダンボールを覗いてみると案外貴重な資料が眠っているのかもしれない。

参考資料

- 1) a) 渡邊幸三. 李時珍の本草綱目とその版本. 東洋史研究 1953; 12(4): 333-357.
b) 白井光太郎. 本草綱目の翻刻本に就きて. In: 本草学論攷. 春陽堂. 1934. p.391-393.
- 2) 牧野富太郎. 本草綱目和刻本ノ一. 植物研究雑誌 1918; 1(12): 307.

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 荒木 二夫 小林 哲 武立 啓子

薬史レター 第88号 2022年3月

編集人：齋藤 充生 発行人：森本 和滋

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局)

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください